【優秀賞】NHK 松山放送局賞
「弟がくれた宝物」　松山市立湯山中学校　３年　増田煌也

僕には大切な弟が二人います。僕は弟たちが大好きです。兄弟の仲が良いのは、他の家庭でも見られることだと思いますが、僕は弟たちから、毎日、宝物をもらっているような気持ちで日々を過ごしています。

僕の三歳違いの弟は ADHD（注意欠陥多動性障害）と言う特性を持っています。薬を飲んでいないと自分の感情を抑え込めず、大きな声を出したり、人に手を出したりすることがありました。また、大勢の中に入ると話し声がうるさく聞こえたり、生活の中で聞こえる大きな音に驚いたりするという、聴覚過敏の症状もありました。そんな弟に対して、僕は兄として、弟の安全を見守り、穏やかに過ごせるよう支えていかなければならない立場です。でも自分がまだ小学生だった頃は、兄の役割を放り出してしまったり、逆に、弟に手を出してしまったりしたこともありました。弟の障害のせいで、自分がいつも我慢をしなくてはならないことへの、イライラした気持ちがあったからだと思います。

弟が小学校に入学した頃には、友達に手を出して、学校から電話がかかってくることが日常茶飯事となりました。弟の言い分も分からない訳でもないですが、感情をコントロールできず、手を出してしまったら、弟の方が悪くなってしまいます。でも、弟の障害は、そのコントロールが難しいのです。だから弟は、手を

出した相手に謝りに行くときも、納得のいかないような顔をしていました。両親は、「頑張って抑えて」と、繰り返して言うしかありませんでした。

弟が三年生の頃、年上の子に手を出してしまい、鼻血を出させたことがありました。相手の家族は、すぐに許してくれましたが、その相手は僕の友人だったため、その友人との関係が壊れないか悩みました。その子は、「気にするな。」と言ってくれていましたが、これからの日々の生活への不安で、僕の心の中からは、もやもやしたものが、なかなか消えませんでした。

僕が中学生になり、まだ小学生だった弟とは一緒に登校できなくなりました。僕はとても不安で、友達に手を出さないか、先生方に迷惑をかけないかなど、心配で仕方がありませんでした。その頃には学校から電話がかかってくることも減りましたが、無くなったわけではありません。

正直に言うと、こんな弟は欲しくないと思ってしまう瞬間もありました。上級生や同級生から弟の行動をバカにする言葉を何度も聞くことがあったからです。しかし、自分の大切な弟を最後まで支え続けたいという思いを胸に、自分のできることを、精一杯頑張りました。投げ出しそうになった時もありましたが、弟は自分にとって、手放したくない大切な宝物だと気付き、弟のことがいつも自分の心の中にありました。

今、弟は六年生となり、仲良くできる友達をつくり、学校で楽しく過ごしてい

ます。今も、薬を飲んでいないときは、けんかをすることもありますが、しっかりと自分の考えで行動ができるようになっています。自分の大切な弟がここまで成長したことに感激しています。

弟のことをよく知ってくれている周りの人たちは、弟に声を掛けてくれ、弟の言葉も優しく聞いてくれています。そのような環境の中、弟は明るく元気に、周りの人たちも笑顔にしています。でも、弟のことを知らない人たちは、弟の行動に対して偏見の目を向けてくることもあります。障害を持っていても、障害を持っていなくても、一人の人間として一生懸命生きています。自分とは違うからと言う理由だけで、見方を変えてしまう世の中が、早くなくなればいいと思います。

僕にとって弟は本当に大切な存在です。弟と一緒に遊んでいる時に、弟は無邪気な笑顔を見せてくれます。その笑顔を見るたびに、弟の成長を感じて嬉しくなったり、自分が落ち込んでいる時には、その笑顔に何度も助けられ元気をもらったりするのです。また、僕の部活動の試合を見に来てくれる弟は、自分の活躍を「すごいなあ。」と喜んでくれます。それを聞くと、弟のために頑張ろうと、練習にも力が入りました。

将来、僕は、差別することなく人に接し、相手の人が過ごしやすい環境をつくれるような仕事に就きたいと思っています。弟がいてくれたからこそ成長することができた自分です。これからも家族と共に、弟のためにできることをしてい

きたいです。そして、弟に寄り添い、弟のこれからの人生を応援し続けたいです。